雑誌『神変』掲載の大峰四十二宿一覧史料について（続）

小　田　匡　保*

はじめに

筆者は，昨年刊行の『地域学研究』第 15 号で同名の拙論を発表した[1]。そこでは，明治末期の雑誌『神変』に連載された大峰四十二宿一覧の史料「大峰山記」について紹介し，全文を翻刻した。

ただ，その執筆段階で，資料とした『神変』誌の第 4 号以前の号を見つけることができず，「大峰山記」の翻刻は，冒頭の部分を欠くことになった。しかし，その後，『神変』への掲載者・海浦義観の自坊である青森県西津軽郡深浦町の圓覚寺から，『神変』第 1 号～第 4 号のコピーを送っていただく僥倖に恵まれた。そして，『神変』第 3 号に，連載の第 1 回を見出すことができた。

そこで本稿では，前稿に掲載できなかった史料の冒頭部分を翻刻し，前稿の欠を補うことにしたい。

史料について若干付言しておくと，後掲の翻刻のように，史料本文の前段には海浦義観の文章がある。その大意は，明治維新の変革によって大峰の霊地が将来忘れ去られることを恐れ，自身所蔵の詳細な史料を書写して掲載しようというものである。

史料名は，前稿では，『神変』誌上で多用されている「大峰山記」を暫定的に採用したが，後掲の冒頭部には「大峰逆峰修行四十二宿七十五路記」との表題がある。これは，前稿で推察したとおりで，同系統の史料の名称とよく似ている。

表題と「第一柳之宿」の間には，大峰修行の意義などについて簡単に述べた部分がある。この箇所を，類似の史料である天理図書館蔵の

表 1　連載の構成

掲載号	発行年月	ページ	紹介記事名	史料名	掲載範囲の最初	掲載範囲の最後
3	明治 42 年　7 月	20～23	温故録	大峰逆峰修行四十二宿七十五路記	第一の最初	第三の途中
5	明治 42 年　9 月	19～23	温故録（二）	大峰宿の記（続）	第三の途中	第四の途中
6	明治 42 年 10 月	18～21	温故録（三）	大峯山記	第四の途中	第四の最後
7	明治 42 年 11 月	23～27	温故録（四）	大峰山記（続）	第五の最初	第十の最後
8	明治 42 年 12 月	18～19	温故録（五）	大峰山記（続）	第十一の最初	第十一の途中
9	明治 43 年　1 月	36～38	温故録（五）続	大峰山記（続）	第十一の途中	第十一の途中
10	明治 43 年　2 月	19～21	温故録（六）	大峰山記（続）	第十二の最初	第十七の最後
11	明治 43 年　3 月	23～25	温故録（七）	山峰（ママ）山記（続）	第十八の最初	第二十一の最後
12	明治 43 年　4 月	14～16	温故録（八）	大峰山記（続）	第二十二の最初	第二十三の途中
13	明治 43 年　5 月	33～35	温故録（九）	大峰山記（続）	第二十三の途中	第二十三の最後
18	明治 43 年 10 月	19～21	温故録（十）	大峰山記（続）	第二十四の最初	第二十九の最後
22	明治 44 年　2 月	20～23	温故録（十二）	大峰山記（続）	第三十の最初	第四十の最後

* 駒澤大学文学部地理学教室

「大峯逆峯修行記」と比較すると，「大峯逆峯修行記」は漢文体で書かれ分量が多い[2)]。『神変』への掲載に際して，その大意を要約した読み下し文にしたのではないかと推測される。

連載の構成については前稿で述べたが，本稿掲載分も合わせて，あらためて表 1 に示した。

翻刻の要領は前稿と同じであり，詳細は前稿を参照されたい。

最後に，貴重な資料をご恵贈くださった圓覚寺様には，深甚なる謝意を申し上げたい。

注

1) 小田匡保「雑誌『神変』掲載の大峰四十二宿一覧史料について」，地域学研究 15，2002，41～67 頁。

2) 「大峯逆峯修行記」の該当箇所を以下に引用する。

夫修験道大峯修行者金胎両部浄利〔刹〕無作本有曼羅〔曼荼〕也。因而入此峯輩不改薄地底下凡体忽登胎蔵八葉中台。踏此地者不転父母所生肉身全証金剛不壊法身。故諸宗名僧知識偕修行此峯。其胎往大和国吉野川其終至紀伊国熊野本宮（句点は小田による）。

なお，この前半部分と同じ表現が，『修験修要秘決集』巻下にある。日本大蔵経編纂会編『修験道章疏 2』（復刻版），名著出版，1985，396 頁。

温故録

竹斎閑人稿

神変大士の遺蹟，理源大師の芳蹤，著名なる大峯山は，維新改革の際稍（やや）変革せる処多くして，将来委しき霊蹟を忘るゝに至らん。余が蔵せるところの大峯逆峯修行四十二宿七十五路記と云ふ書は，文政年中信陽蓼科嶽孝養院宥械當観房大呼と呼ふ人編輯せるものにて，霊蹟委しく，且入峯俗行者懺悔（さんげ）礼拝の為めに唱ふす道歌もあり。入峯修行者の道しるべにもならんと思ひ，写して毎号掲載せんとす。貴会幸に余が婆心を察して，余白を与へられんことを乞ふ。

大峰逆峰修行四十二宿七十五路記

夫（そ）れ修験道の大峰修行は，即身即仏の法行にして，諸宗の名僧碩徳（せきとく）共に之を修行し，誠に金胎（こんたい）両部の浄刹なり。其初めは大和国吉野川よりして，紀伊国熊野本宮に到り終るなり。

第一柳之宿

〔吉野川・六田の渡し〕

先（まず）吉野川の渡場三所あり。上市の渡り〔し〕を桜の渡しと名（なず）く。瀬の上を梅〔椿カ〕の渡しといひ，六田（むだ）を柳の渡しといふ。

此六田の渡しは，大峰中興開山・聖宝理源大師，渡し守六人を置れし所なり。此事元享〔亨〕（げんこう）釈書等にあり。

又，浄蔵貴所といふ高僧，大峰修行の節，満水にて渡り得ざりしを，大峰の仙人源太主・藤太主といふ二仙出て，浮木を出して渡せしといふ。

此川にて，僧俗ともに垢離をとりて登山す。俗行の者懺悔して，秘歌并に真言を唱ふ。其歌に，

父母の　織て着せらる　から衣　今ぬき捨る　吉野川水

巴より　落る滝つ瀬　みよしのや　清き流を　伊勢と三熊野

此吉野川の水上は大峰に続き，王〔大〕台ケ原といふ所に大池あり。其池より三方へ流れ出る。伊勢は宮川とて東へ流れ，南は紀州熊野浦，北は此吉野川なりといふ。

〔七五三掛〕

又，七五三掛（しめかけ）といふ所にて，俗行の者懺悔の歌に，

身の穢れ　除きて清く　七五三掛の　神移ります　しるしなるらん

〔柳の宿〕

第一の柳の宿は，六田町を離れ，桜の馬場の登り口，石像の役行者を安置したる辻堂，是則ち柳の宿地なりと。然れども，田村〔六田村カ〕・橋家邑〔橋屋村カ〕・佐〔左〕曽村を総じて柳の宿といふ。

〔一の坂・嵐山〕

吉野山へ登る坂を一の坂といふ。夫より嵐山。此山は南帝の勅にして，京師（けいし）の名をとり玉ふよし。此辺より芳野の町まで五十丁の間，並木等皆桜なり。

第二　丈六堂之宿

〔一の蔵王堂〕

此宿は一の蔵王堂といふ。寺号は勝福寺。俗呼で一の行場といふ。此所は吉野真言寺中間にて支配す。俗行の者，扇并に髪の元結を解て，蔵王の宝前に納めて駈入る。懺悔の歌に，

是よりは　後世（ごせ）の願ひの　要とて
あふきの風の　心涼しき

第三　峰之坊宿

〔峰の薬師〕

永峰の薬師堂の事なり。本尊は日本峰の薬師如来三体の内の一体なり。役行者の守本尊といふ。則ち吉野真言寺院の支配なり。

〔永峰・村上義光碑〕

此辺より千本茶屋迄を総じて永峰といふ。此間に，信濃国の住人，村上彦四郎義光（よしてる），大塔の宮に供奉（ぐぶ）し，宮に代り奉りし所あり。今，石の碑あり。

〔一目千本・四手掛明神〕

又，一目千本，日本の花といふ所あり。実に一目に数千本の花を見渡す所なり。此所の下に社あり。四手掛（しでかけ）明神といふ。飛鳥井大納言〔雅章〕の歌に，

吉野なる〔山〕　花のゆふして　かけまくも　かしこき神の　心をそしる

〔関屋の花〕

夫より芳野入口。千本茶屋より黒門迄，関屋の花といふ。又隠れ松といふあり。

〔身替地蔵堂〕

次に身替地蔵堂。此本尊は，昔し日蔵上人，笙の窟にて夢中に地獄に使し玉ふ時，其体死せしと思ひ，土人焼捨ける。其後蘇りける節，此地蔵尊，日蔵に代り玉ふと伝ふ。

〔吉野山の町名〕

吉野の町は人家千軒といふ。大橋・黒門町・仁王門・下町・稲荷町・市場町・東南谷・宮坂町・東院町・天王町・子守町・南院谷・西室町・十方院谷等なり。

〔黒門・藤井坂・役行者閼伽井〕

黒門の内藤井坂を上れば，右の方に役行者阿〔閼〕伽井あり。其より旅籠屋町続きあり。

〔金の鳥居〕

一の鳥居，銅の華表（かひょう）なり。高さ二丈五尺，廻り一丈一尺，額は弘法大師の筆にて，発心門と飛白（かすり）大字なり。爰（ここ）にて放光〔藤原敦家〕が歌に，

夢覚ぬ〔ん〕　こ〔そ〕の暁を　まつほどの
闇をも照せ　法（のり）のともし火

俗行の者，此金の鳥居を三返廻りて，

吉野なる　金の鳥居に　手を掛て　阿字本来の　道にこそ入る

〔蔵王堂〕

旅籠屋町を行けば二〔仁〕王門あり。直に行けば蔵王堂，右へ行けば実城寺，左へ行けば馬道なり。此辺も花，見ごとなり。

二〔仁〕王門過ぎて本堂なり。本尊は行基菩薩の作，蔵王権現，御長（たけ）二丈六尺，本地（ほんじ）釈迦如来，又左の尊二丈四尺，本地千手観世音，右の尊二丈二尺，本地弥勒菩薩なり。又弘法大師彫刻の不動明王，理源大師製作の役行者。

当山は，文武天皇大宝年中の御建立なり。寺領千石。此本堂の内に荒木の柱あり。これ躑躅が岡より出たるつゝじなり。又定朝の作の狗〔狛〕犬あり。狗〔狛〕犬自ら喰合て，大床より落たるよし，盛衰記に見ゆ。

〔四本桜〕

本堂の前に四本の桜あり。護良親王，管絃ありし所なり。俗行の者，此所にて唱ふ秘歌に，

み吉野や　四本桜の　盛にて　玉石光る
妻手（めて）にすぢかい

〔威徳天満宮〕

堂の右の方に，大〔太〕政威徳天神の社あり。

天暦年中，日蔵上人勧請なり。

〔日蔵〕

日蔵は洛陽の人。延喜十六年二月，金峰山にて薙髪（ちはつ）して，塩穀を絶し精進す。後は東寺に住し，金峰山に往来し，天慶四年の秋，金峰山にて三七日絶食し，密供（みっく）を修行す。八月朔日忽（たちまち）に気絶し，一つの窟に至る。蔵王権現の冥誘に依て，地府（ちふ）に赴く。延喜帝に謁し奉る。此由を主上に告（つげ）奉りけるに，上皇王考（ママ）の奉為（ママ）に，日蔵と心力（しんりょく）を戮（あわ）せ，蔵王・菩薩の両大像を造り安置し玉ふことは諸書にあり。

〔実城寺〕

又本堂より西方，実城寺は，天台宗にて，後醍醐・後村上の二帝五十六年の間の皇居なり。帝〔後醍醐天皇〕の御製（ぎょせい）に，

都たに　淋かりしを　雲晴ぬ　吉野の奥の五月雨の頃

此寺は，今に南朝御殿の儘（まま）なりといふ。

〔三船山〕

次に三船山は，蔵王堂の真東に見ゆ。万葉集の歌に，

滝の上〔上の〕　三船山より　秋津辺〔あきづへ〕に　きなき渡（わたる）は　只〔たれ〕喚（よぶ）子鳥

〔稲荷明神〕

稲荷明神は，蔵王堂の前にあり。信濃国滋野坊といふ者の勧請といふ。

〔駄天山・朝の原〕

又一町余り東に見ゆる山を駄天山といふ。其山の東の方を朝の原といふ。続後拾遺（しょくごしゅうい）集に，

吉野山　霞たちぬる　けふよりや　朝野〔あした〕の原は　若菜摘らん